

商業高校におけるALへのチャレンジ、その第一歩

県立千葉商業高等学校

1 はじめに

(1)千葉商業高校の概要

本校は、1923（大正12）年に創立されてから98年の星霜を重ねている学校であり、卒業生は28,266名（令和元年度まで）を数える。千葉市中央区松波という閑静な住宅街に立地し、最寄りの西千葉駅からは徒歩7分、千葉駅からも徒歩12分という交通至便の場所に位置し、松波地区唯一の学校として地域の皆様から温かな声援を頂戴している。

千高教研商業部会の事務局が常置され、千葉県商業教育の拠点校としての重責を担っている。令和元年度の商業部会総会の講師として産業能率大学教授（当時）小林昭文先生をお招きしたことから御縁をいただき、アクティブラーニング（以下、「AL」と記す）へのチャレンジを本格的に始動させた。

(2)そもそもALとは？

巷間にはALという言葉が氾濫し、いささか食傷気味の感がないでもない。「AL祭りは終わった」とは、御指導いただいている小林先生の言である。「一時の流行ではなく、本質にまで踏み込んだ真のALを研究、実践する段階に至った」という主張であると理解している。本校ではALの【目的】と【目標】について、以下のような共通理解の下で研究を進める。

【目的】生涯にわたるアクティブラーナーを育成すること

【目標】生徒の頭がアクティブな状態になっていること（生徒の「行動」ではなく）

2 研究の進捗

(1)令和元年度

①研究方法

小林先生が推奨するAL、すなわち【説明（短めに）→ワーク（長めに）→確認テスト（100点をとらせる）→振り返り（「個」に立ち帰る）】（以下、「小林式AL」と記す）という基本パターンで授業を展開する。その授業について、教師は「チェックリスト」で自分の授業を振り返るとともに、生徒には「アンケート」に回答させ、両者をクロス集計することによって【先生がどのような授業をすると、生徒は何かできるようになるか】を探ることとした。

(ア)教師「チェックリスト」の項目

- a 始業チャイム30秒前に入室する。
- b 生徒には穏やかな表情で声をかける。
- c 始業チャイムと同時に授業を開始する。
- d ストップウォッチで説明時間を確認する。
- e 説明の際は「あー」「えー」など無駄な発語をせず、思いつきの昔話もしない。
- f 説明時は、生徒の顔を見ながら説明する。
- g 板書が必要ない説明の時には、教壇を降りて教室内を巡回しながら説明する。
- h ワークを指示する際には、制限時間、到達目標、ルール設定について明示する。
- i ワークの間は教壇を降りて生徒を観察し、必要に応じて質問により介入していく。
- j 授業終了時刻を厳守する。

(イ)生徒「アンケート」の項目

- a 眠くならなかった。
- b 集中し続けていた。

- c 仲間の多様性が学習の効果を支えていた。
 - d みんなが協力している感じがした。
 - e 一人ではできないことができたと感じた。
 - f 授業時間が短く感じた。
 - g 先生にやらされている気がしなかった。
 - h 対話の効果を実感した。
 - i 学校生活に役立つことを得た感じがした。
 - j 内容についてもっと深く学びたくなった。
 - k 自分の生き方や考え方を変えるインパクトを感じた。
- 1 こんな授業を毎日受りたい。

②結果及び考察

教師の振り返りと生徒の感想に、以下のような相関の傾向が見られた。

(ア)教師 d → 生徒 f・j・k

説明時間を厳守して生徒のワーク時間を確保すると、生徒に授業時間を短く感じさせ、更に学びたいという意欲を生じさせる。

(イ)教師 h → 生徒 b・c・d・e

ワークに入る前に、到達目標や制限時間を明示することで、生徒は集中を切らすことなく「対話的な学び」を継続できる。

(ウ)教師 i → 生徒 e・i・j・k

ワークの時間、教員が生徒に対して積極的に介入（質問で声をかける）することが、生徒の活動を充実させる。

(2)令和2年度

前年度から一歩前進させ、より具体的な成果を出すことを目的に「授業改善委員会」を組織して校内分掌に位置付けた。しかし、コロナ禍はALを推進する上で大きなブレーキとなる。そこで、ソーシャルディスタンスの維持、マスクの着用、声の抑制、という3条件が全て満たされる場合に限り、ALを実施することとした。その際、令和元年度の調査

から見えてきた、「ワーク時間の確保、目標等の明示、教員の積極的関与」を実践する中、新たに生まれた課題についてはZoomを活用し、小林先生から直接指導・助言を受けるという形で研究を進めることとした。以下に代表的な質問を掲げる。

Q1 ワークに向き合う態度を評価したいが、どのように工夫したらよいか？

A1 5段階評価の場合、通常1・2は付かない。基本を4としてプラスがあれば5、マイナスがあれば3とする。

Q2 生徒に対してALのゴールを示したいのだが、何をもって成功であると説明したらよいか？

A2 自分で学べる、友人に聞ける、先生にリクエストできる。そうした態度が育成されればゴール到達と見なせる。

Q3 生徒の進度に差が出てくるので、できの良い生徒に他の生徒を教えさせている。できる生徒をどう伸ばすか？

A3 できる生徒は授業時間外に呼び出し、個別に高いレベルの指導をする。

3 おわりに

今後の展望としては、小林式ALの方法論を更に深く学び、千葉商業高校の生徒たちに適した形での授業展開を模索していくことになる。なお、小林昭文先生の著作は数多く刊行されており、どれを手にしても参考になるが、本研究においては『アクティブラーニング入門』（産業能率大学出版部、続編として2・3も既刊）を主なテキストとした。紙幅の関係で、本研究の概要しか報告できなかったが、御質問・御感想等をお寄せいただければ幸いである。

千葉商業高等学校 TEL 043-251-6335
校長 岩瀬俊彦 tiws10@pref.chiba.lg.jp